いろは新聞

2014年(平成26年)1月発行
第25号
発行元 福生市立中央図書館
福生市熊川850-1
TEL 042(553)3111
http://www.lib.fussa.tokyo.jp

オススメコーナー

すべて図書館で所蔵している本!借りに来てネ

あたしはビー玉
山崎ナオコーラ／著
幻冬舎(二〇〇九年)

ひとりきりの部屋で男子高校生、清順は急に声を掛けられる。
恐る恐る声の主を探してみると、そこにいたのはビー玉!?
女の子のビー玉をポケットの中に連れた清順の日々。バイトをはじめたり、今まで仲良くなかった友達と急にバンドを組んでみたり、キラキラした、青春。
やがてビー玉は「ただ清順の理解者でいるのでなく、もっと独立したい」と思うようになります。
女の子の「自立」とは。可愛い表紙と軽快な語り口にすいすいと読めますが、実は深いテーマを扱った書。ラストは衝撃です。

(萌)

島はぼくらと
辻村深月／著
講談社(二〇一三年)

本土とはフェリーで行き来するような、小さな離島が舞台。この島の高校生は朱里、衣花、新、源樹の四人だけ。
生まれた時からずっと一緒ですが、島には大学がありません。もうすぐ終わってしまう、共に過ごす日々。
島で暮らすとはどういうことか。たくさんの諦めなければならないことがあって、腹に一物持っているような濃すぎる人間関係があって。
けれどやっぱり生まれたこの島が大好き。島の母親たちは、子どもが十五歳で家を出ていくことを想定し子育てをするそうです。
母子手帳にたくさんのメッセージを残します。あたたかでさわやかな青春&地域小説。

(萌)

蝉丸Pのつれづれ仏教講座
蝉丸P／著
株式会社KADOKAWAエンターブレイン ブランドカンパニー(二〇一二年)

お盆もやってクリスマスも祝って正月の初詣は神社で……と、いろんな宗教がごっちゃになっている日本にいると「そもそも宗教って何のためにあるの?」という疑問が浮かぶ人も多いのではないでしょうか。
この本は仏教の解説を中心にしながらも、そういった「宗教って何?」「そもそもなんで宗教って生まれたの?」という部分を、神様抜きに理屈から説明しているわかりやすい本です。
仕事の合間を縫ってPCゲームに精を出す僧職系男子、リアル住職略してリア住の蝉丸Pが、現代の坊さんの生活や数多のゲームネタを交えて送る、真面目な話から笑える話まで何でもありの一冊。話半分に読んでも十分面白いです。

(企)

ガラスの麒麟
加納朋子／著
講談社(一九九七年)

「人の心って難しいとおもいませんか?まるですごく難しい漢字みたいに」通り魔に襲われた十代の女子高校生は、聡明だけれど繊細な一面を童話に託してこの世を去って逝った。
「意味のない生は嫌だ。だけど無意味な死はもっと嫌だ」彼女はどうして殺されてしまったのか、徐々に明らかになっていくミステリー!所々に散りばめられた童話が存在感を示しています。

※日本推理作家協会賞受賞作

(つ)

夜は短し歩けよ乙女
森見登美彦／著
株式会社KADOKAWA角川書店BC(二〇〇八年)

「親指をひっそり内に隠して、堅く握ろうにも握られない。そのそっとひそませる親指こそが愛なのです」と黒髪乙女の彼女は語った。そんな彼女に想いを寄せる先輩は、様々な所で彼女の姿を追い求めた。しかし、鈍感な彼女は、頻発する「偶然の出逢い」にも「奇遇ですねえ!」というばかり。そんな二人の恋愛ファンタジー。
不思議な世界観に、いつの間にか引き込まれるお話です。

(愛)

光とともに…
~自閉症児を抱えて~
戸部けいこ／著
秋田書店 書籍扱いコミックス(二〇〇一年~二〇一〇年)全十五巻

ある日、東家に「光」という男の子が生まれました。その子は生まれつき自閉症でした。親に甘えなかったり、呼んでも振り向かなかったり…。
このマンガは、いろんな人の手をかりて、光が成長していくのを描いている心温まる物語です。

(☺)

座右の古典
賢者の言葉に人生が変わる
鎌田浩毅／著
東洋経済新報社(二〇一〇年)

火山学者である著者が古今東西のたくさんの古典のあらすじ、作品のポイント、作中のとりわけ重要な一文に分けて紹介してくれる。歴史、美術、心理学、哲学、科学、戦争と多岐にわたる内容の中から、あなたらしい生き方のヒントをみつけられるかも?

(つ)

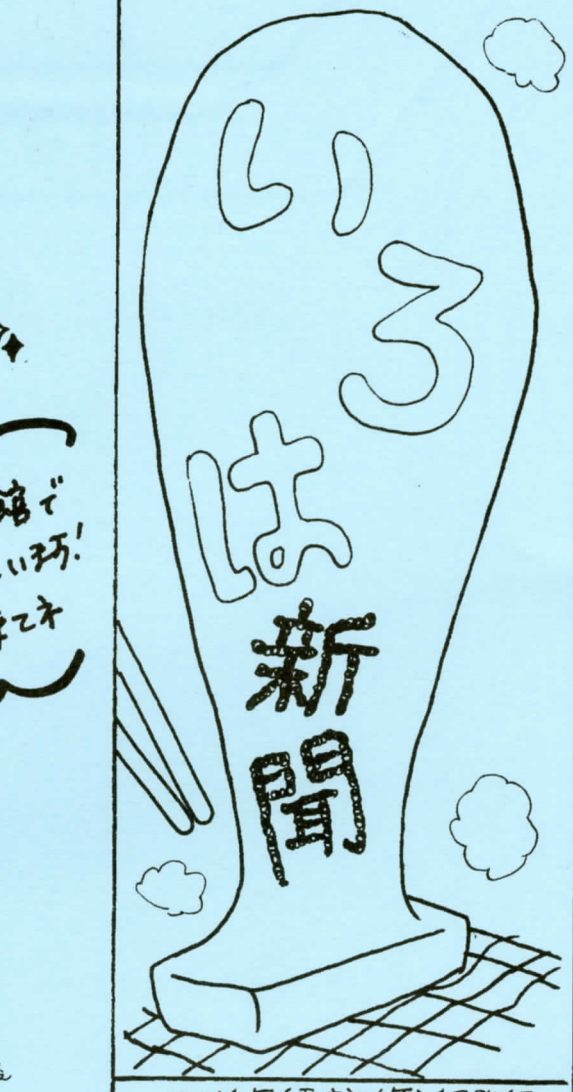
トーキョー・クロスロード
濱野京子／著
ポプラ文庫ピュアフル(二〇一〇年)二〇〇八年刊の加筆・訂正

山手線の地図にむかってダーツをして当たった駅の周辺を気の向くまま歩く。それが主人公・森下栞のおかしな趣味だった。普段とは違う格好をして歩く、私ではない私にあわい喪失感にひたる…そんな自虐的な快感を楽しんでいた。ある日、中学最後の年の同級生である月島耕也と再会する。耕也は栞の趣味に度々ついてくるようになって…?
似たようなものの見方をする二人、付き合ってしまえばいいのにと思いますがそう簡単にはくっつかない二人の関係性が魅力的です。最後の山手線ホーム上の再会では思わず笑みがこぼれてしまいます。

※第二五回坪田譲治文学賞受賞作

(Bukuma)

よだかの片想い
島本理生／著
集英社(二〇一三年)

理系大学院生女子が映画監督に恋をした。
ちょこっとだけ人と違うのは、彼女が生まれつき頬に青いあざがあること。
このまま一生、研究室で目立たないように生きていくんだと思っていた。けれど監督は彼女の顔写真をみて「真っすぐ強い目ができる人」だと言った。
やっと恋人になれた監督が誕生日にくれたブレスレット。Aの形のチャームが素敵で、アイコという自分には〝見た目に反して〟可愛過ぎると思っていた名前を、初めて肯定できた。
それは大げさでなく、生きていくのに必要な恋だった。
恋を手に入れるのは勇気のいること、更に彼女にとっては人より余計に。そして、恋を手に入れることよりももっと勇気のいることが本書の二〇九ページで分かります。

(萌)